

本日、ご参加いただきありがとうございます

- 簡単な紹介をお願いします。
- 自己紹介 場所など
- 参加の興味・関心などの根拠などお聞かせください。
- 本日のテーマ「**歌川広重の生涯と作品の軌跡**」です。

歌川広重の生涯(1797~1894)

①

誕生から
幼少期
14歳まで
1797~1810

- ・江戸八代洲河岸に生まれ、名は徳太郎
- ・13歳に父源右衛門が退去し火消し同心として家督を継ぐ

②

広重デビュー
忍耐期
15~34歳
1811~1830

- ・歌川豊広に入門
- ・歌川広重に改名
- ・小川町の出火に際する出精ぶりを認められ幕府より賞賛される。
- ・定火消同心職を仲次郎に譲り代番となる
- ・この頃鉄蔵改名か・豊広逝去後二代目を襲名か

③

風景版画に
開眼
不動の地位を確立
35~51歳
1831~1847

- ・一立斎と改名
- ・曲亭馬琴の古希祝賀書画会に出席
- ・中山道を経由し大阪から四国丸亀へ帰路は奈良/伊勢を経て東海道を江戸へ戻る
- ・妻没した後、お安を後妻に
- ・房総へ旅行

④

旺盛な活動
人気絶頂の時
52~59歳
1848-1855

- ・信濃国飯田へ旅行
- ・常盤町から中橋狩野新道に転居 新居披露の書画会を日本橋万町柏木で開催
- ・江戸・智香寺の住職了信の娘お辰を養女に
- ・肉筆画多数制作
- ・天童広重と呼ばれる

歌川広重の生涯(1797~1894)

⑤

晩年の時代
60~62歳
1856 - 1858

- ・ 剃髪して法体となる
- ・ 浅草新寺町の曹洞宗南昌山東岳寺に埋葬

⑥

没後
71~74歳
1830 - 1833

- ・ 門人の重宣・広重の養女お辰の入婿となり、二代広重を襲名

歌川広重の美術館紹介



静岡市東海道広重美術館

誕生・幼少期(1~14)



1 広重が生まれた定火消屋敷は馬場先御門外の八代洲河岸にあった。現在、明治生命館が立つあたりである。[東京都千代田区丸の内1-1]



2 53歳から没するまでの約10年間に暮らした中橋狩野新道の住居跡には案内板が立てられている。[東京都中央区京橋1-9]

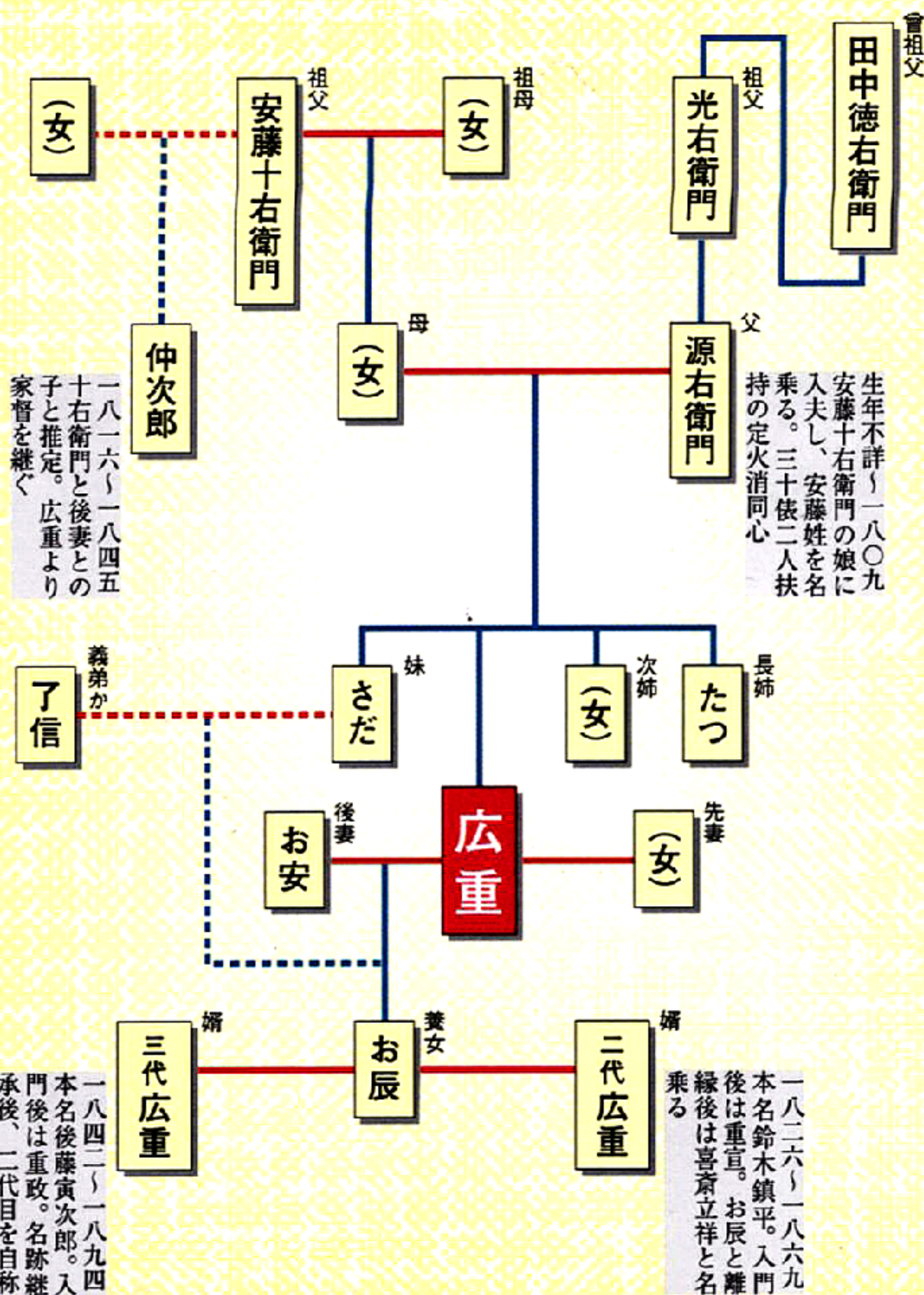
○ 三十俵二人扶持、微禄ながらも幕府御家人である火消同心の武家に長男として生まれた広重。

父母の相次ぐ逝去、それに伴う家督の相続と、精神的にも経済的にも負担が重くのしかかるなか、幼い心を慰めたのは唯一絵を描くことだったのだろう。

広重は寛政九年、江戸に生まれた。

誕生したのは江戸城のすぐそば、馬場先門にあった定火消屋敷である。定火消とは旗本を筆頭とする江戸城および市中の消防組織

広重家系図

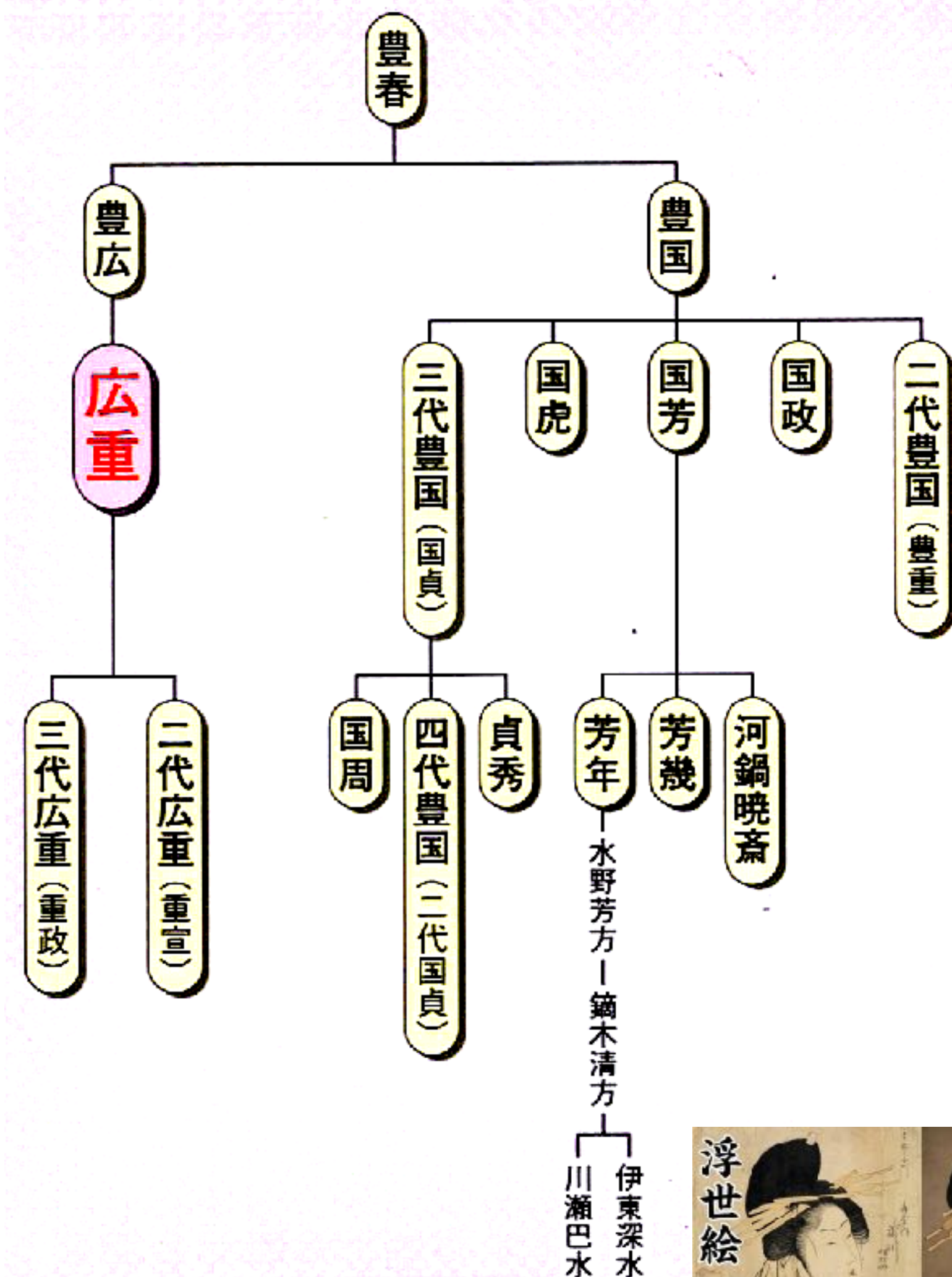


親子・兄弟

婚姻関係

1811(15歳)~1830年(34歳)

①-1・広重デビュー、忍耐のとき



歌川派略系図

○ 文化9年ごろ、16歳になった
 広重は画号を与えられ、浮世絵師
 として画壇に登場する。おそらく
 その前年ごろ、広重は浮世絵師歌
 川豊広に入門しており、与えられ
 た画号は師の号と自らの本名重石
 衛門とからそれぞれ一字ずつとら
 れたものであった。

○ 文化期の浮世絵界は読本挿絵や美人画がふくの画幅である**北斎が評判を呼んでいた**ものの、浮世絵の花形である色摺の錦絵版画では**歌川豊国が美人画と役者絵の双方で大人気**であった。このため広重も豊国に入門希望したというが、門人多く手一杯との理由で断られたといい、結果的に**その弟弟子豊広の門を叩いた**のである。



広重を育んだ師、歌川豊広の画風



歌川豊広「御殿山観桜美人図」(部分)
紙本著色・掛幅一幅 文化年間(1804
~1818) 出光美術館蔵

広重の師歌川豊広といえは、主要な活躍の場は肉筆美人画であるといえることができるだろう。彼の美人画の画幅はその当時需要が高かったとみえるが、初期には、歌川派の祖で、豊国や豊広を育てた偉大なる絵師歌川豊春とよはるの画風を残すものもある。そののち、面長な顔立ちにやや細い目を描く独特の美人画の画風を確立し、それらをもっぱら版画ではなく絵画作品として仕上げている。

兄弟子豊国の、大衆受けのいい華のある画風とくらべると、確かに豊広の作例は穏やかで、大人しいといった印象を拭いきれない。だが、彼が試みた風景版画には叙情性が宿っており、そこには後年の広重誕生の萌芽をみることもできる。

1811(15歳)~1830年(34歳)

①-2・妖艶な美人画



○ デビュー当時の真摯な力作「中村大吉の八条局と中村芝翫(しかん)の平清盛」大判錦絵文政元年(1818)

頃・・・広重最初期の錦絵で文政元年11月の中村座顔見世興行「伊勢平氏撰(へいきの)神風」に取材した役者絵。実質的な広重のメジャー・デビュー作である。売れ行きはともかく、**懸命に描いた**感があり、**好印象**が持てる。

○ 匂い立つ遊女の情け・外と内姿八景格子の夜雨まかきの情(せい)らむ大判錦絵文政4~5年(1821~1822)・・・老舗版元、永寿堂から版行した美人画集で、文政期の画業を代表する作品。中国の瀟湘(しょうしょう)八景に見立て、屋内の美人像を主に、コマ絵内の屋外や室外風景を従にして2景ずつを消化し、4図で揃いとする。豊かな着想とともに、**妖艶な猫背形美人画**表現も見逃せない。



1831(35歳)~1836年(40歳)

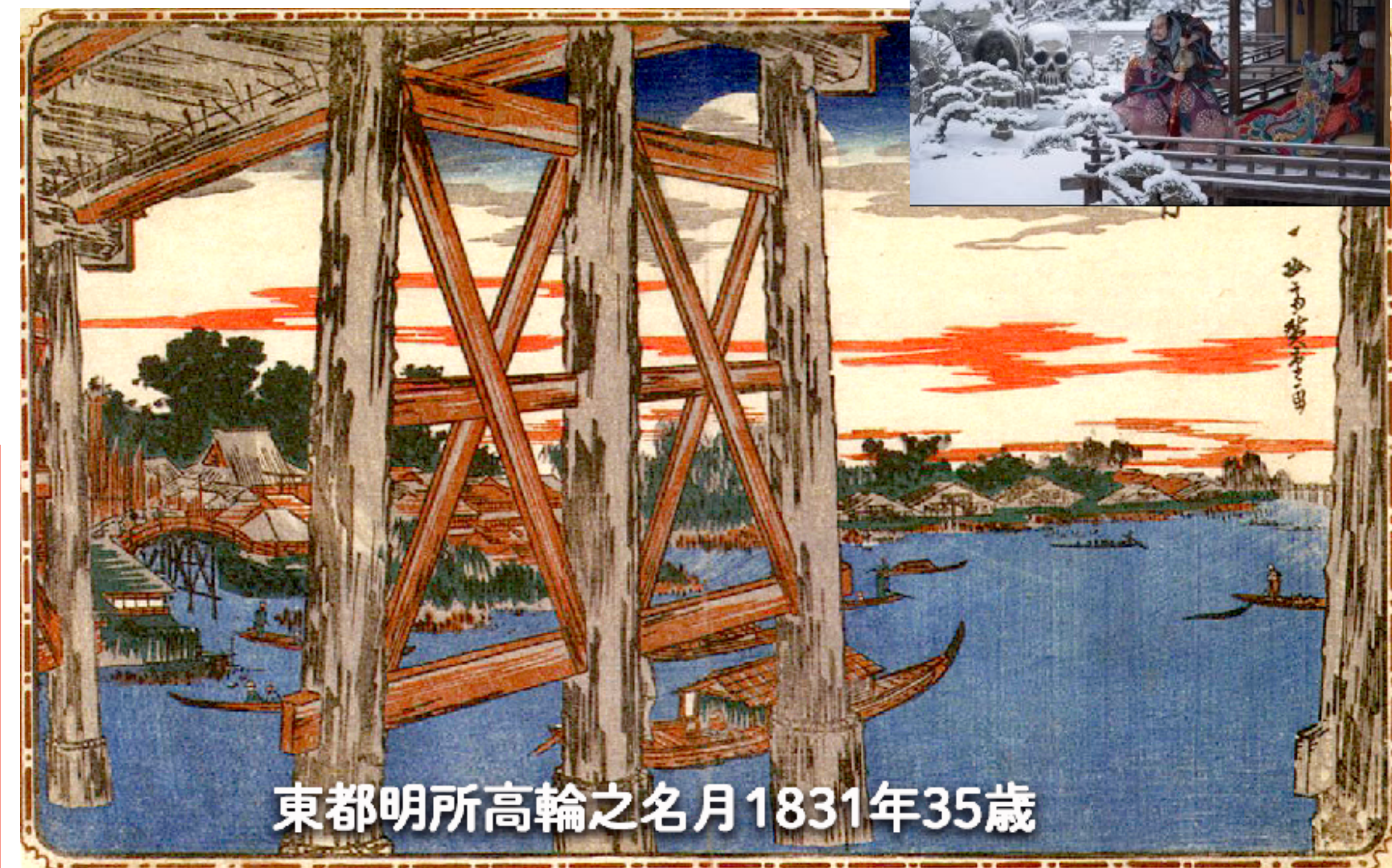
②-1・風景画で大輪の花を咲かせる

○家職を退き、1830年天保元年、志も新たに一立斎と改号した。このころようやく風景版画に開眼。ありのままの景色を、より穏やかにしっとりと描き、人気絵師として不動の地位を確立していく。すでに**1823年・文政6年27歳**には火消同心職を安藤家直系にあたる祖父の子に譲って代番となった広重は、文政後期からほぼ**専門の画工**として再始動していた。



東都名所両国之宵月・大判錦絵・天保2年(1831)

○「一幽斎がき」の名才知られる連作・東都名所両国之宵月・大判錦絵・天保2年(1831) 35歳・・・天保2年ころから出版された東都名所の連作で、「高輪之明月」を含む十一枚揃。奥行きのある広やかな空間を、藍を基調とした彩色で摺り出す。一幽斎の斎号で描かれた広重の本格的な名所絵の第一作だが、他画派の筆法や遠近法の獲得過程は謎である。両国橋の橋桁越しに愛でる名月は秀逸だ。



東都明所高輪之名月1831年35歳

1831(35歳)~1836年(40歳)

②-2・名所絵師広重の成功



○五十三次の旅がここから始まる・東海道五拾三次之内・日本橋・朝之景(あさのけい)大判錦絵 天保4~7年(1833~1836)・・・幕府が定めた五街道のなかでも、都と江戸とを結ぶ最重要幹線が東海道である。その基点日本橋は、朝霧に包まれたすがすがしい早朝の景色である。大名行列が出立する橋の手前側を、魚河岸から仕入れたばかりの荷を担ぐ棒手振(ぼてふり)の行商人が足早に横切っている。

○天を突く万杖(ばんじょう)の山、千仞(せんじん)の谷・東海道五拾三次之内・箱根・湖水図・大判錦絵・1833~1836・(37~40歳)・・・「天下の険」と歌われた箱根は、険しい山路に加えて関所も設けられるなど、街道の難所のひとつであった。本作品でも山中の陸路を進む行列が難儀している。山肌にあられる色彩や形には造形面で大胆な冒険がみられ、遠くの富士や湖面の美しさあいまって、印象に残る一作である。

1833(37歳)~1836年(40歳)

②-3・名所絵師広重の成功



○ 一切の音を感じさせをい白銀の世界・東海道五拾三次之内
浦原夜之雪（1833～1836）・・・雪景としては、本連作の
みならず広重作品を象徴する傑作。深々と降り積もる雪のな
か、緩やかな傾斜のついた街道を旅人たちが難渋しながら歩
んでいる。点々と残る深い足跡に、「あわれ」の感情を読み
込むのはセンチメンタルに過ぎるか。



○ 竹藪のざわめきが聞こえるよう「東海道五拾三次之内庄野白
雨」大判錦絵 天保4～7年（1833～1836）・・・にわか雨に打
たれながら、山道をあわてて駆け抜ける駕籠かき。傘を手にした
旅人も、先を急いでいる。雨や雪を味方につける広重の風景画で
は、あまりにもよく知られた秀作のひとつ。シンプルな構図ど
りの画面だが、背後の竹藪のざわめきさえも伝わってくるようだ。

1831(35歳)~1836年(40歳)



○冷気を感じさせる雪晴れの旅路・東海道五拾三次之内亀山・雪晴(1833~1836)・・・蒲原、庄野と並び、保永堂版東海道の三役物とされる作品のうち最後の一図が亀山の景を描いたもの。版画ではしばしば大名行列が登場するが、ここでも亀山城へと向かう一行を描き込んでいる。ひんやりとした冷気が肌を刺すような、雪晴れの日のまばゆくも美しい風景を再現している。

②-4・ベロ藍の流行・浮世絵界の「青の時代」



○ベロ藍の流行～浮世絵界の「青の時代」・・・ベロ藍（ベルリンブルー）は、**オランダ舶来の染料**で、幕末期には**中国などで安価に生産**されたもの。鮮やかな発色が際立つこの新しい青色は、既存の藍色（インディゴブルー）とはまったく異なるものであり、当初は上方で出版された版本類に部分使用されることが多かった。

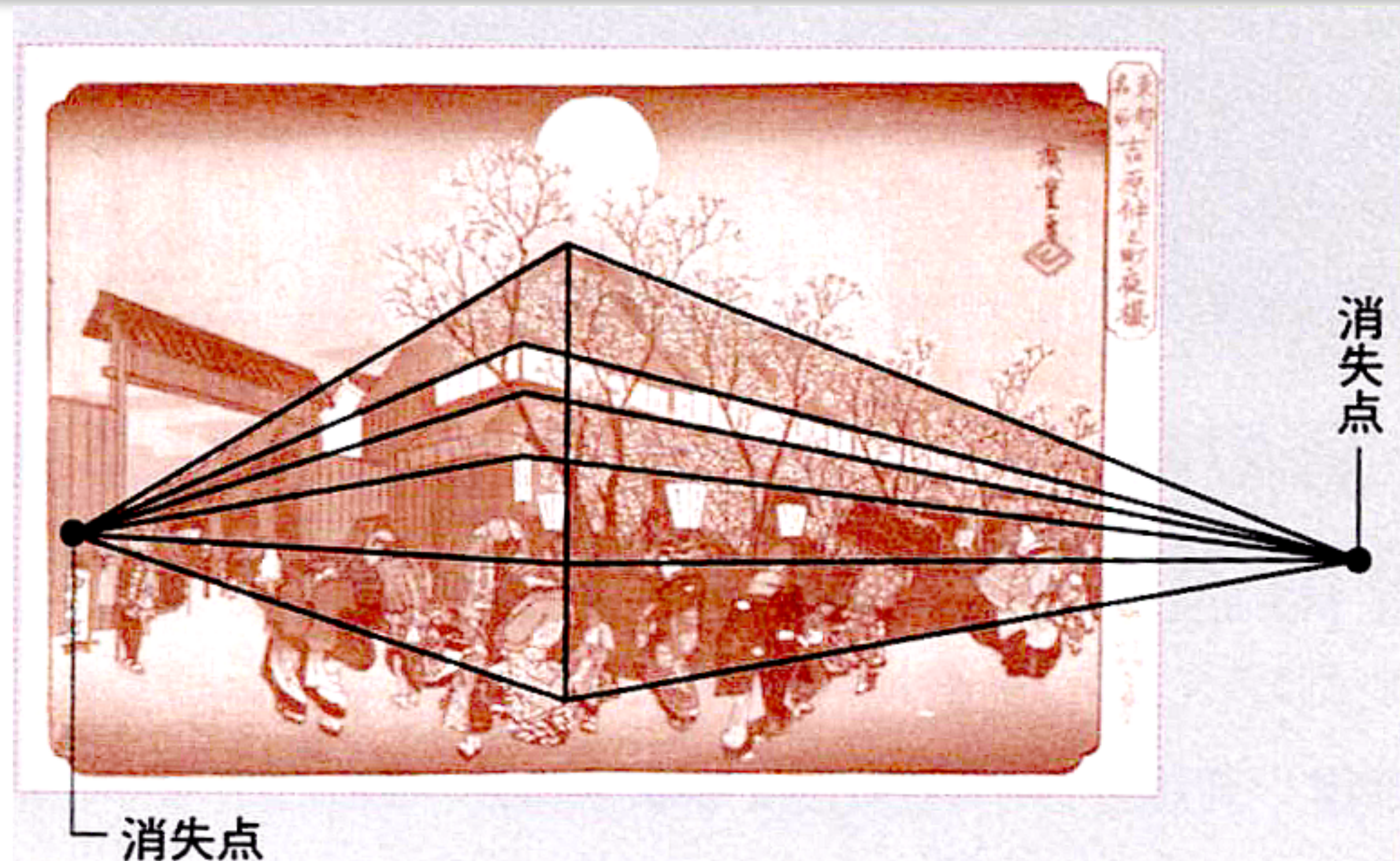
江戸の浮世絵にこれが使われ始めたのは**文政年間（1818～1830）末**で、浮世絵師溪斎英泉の**団扇絵**に用いられたものが早い。その直後、天保2年ごろから北斎が「**富嶽三十六景**」の発表を開始するが、その初期の作などは「**藍摺絵**」と銘打たれており、すなわち、このベロ藍と既存の藍とを併用して摺り出すことが念頭に置かれたほどであった。**浮世絵界には大きな色彩革命**が起こり、「**新しい青**」は、**広重もいち早く導入**するなど版画界を席卷したのである。

1832(36歳)~1839年(43歳)



○夜桜に匂い立つ花街の一夜「東都名所・吉原仲之町夜桜」1832~1839・・・吉原遊廓の夜景を、毎年新たに移植される桜の開花と絡めて描く。ただでさえ遊楽の匂いが強い歓楽の地に訪れた、妖艶な春のひとこまである。月を空の中央部に置き、正確な二点透視図法で町並みを描いた手腕は、製図のような味気ない無機質さからも逃れて、生々しい人の体温を感じさせる。

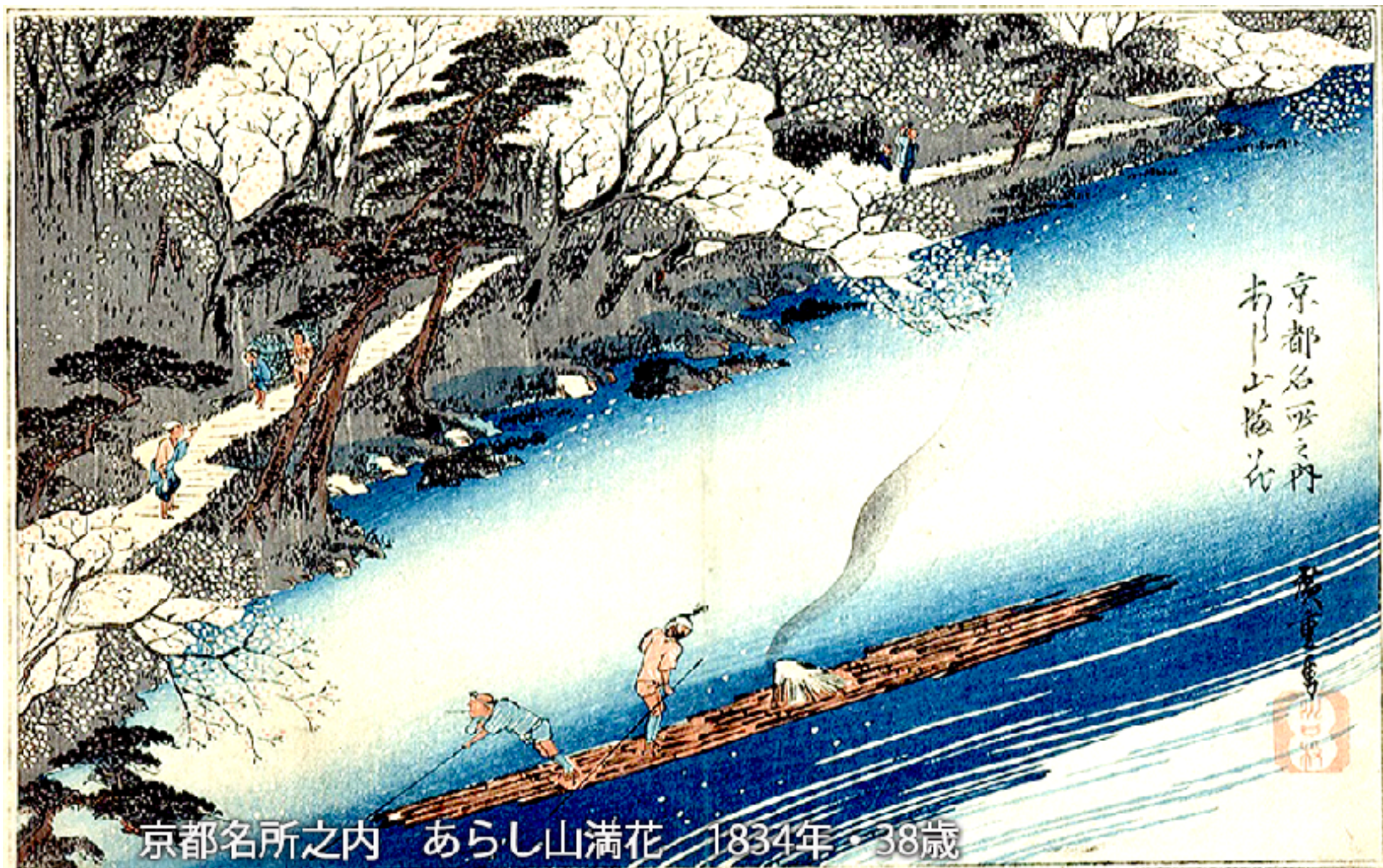
②-5・透視図法を取り入れた描写



○広重の作品には、これも遠く西洋に由来する透視図法が用いられている。消失点を設け、そこを基点として線條を引くことで風景の遠近感を自然なものとするこうした技巧は、すでに18世紀中葉から日本に取り入れられていた。広重はこの透視図法を正確に学習して自作の風景表現に反映したため、結果的に破綻のない風景画に仕上がっている。一点透視図法のみならず二点透視図法も用いるなど、高度な技術を修めて近代的な風景画に仕上げたところが、一見古びていて、実は新しい広重の風景表現の真実なのだ。

1834(38歳)~1842年(46歳)

②-6・躍進期・広重芸術の真価

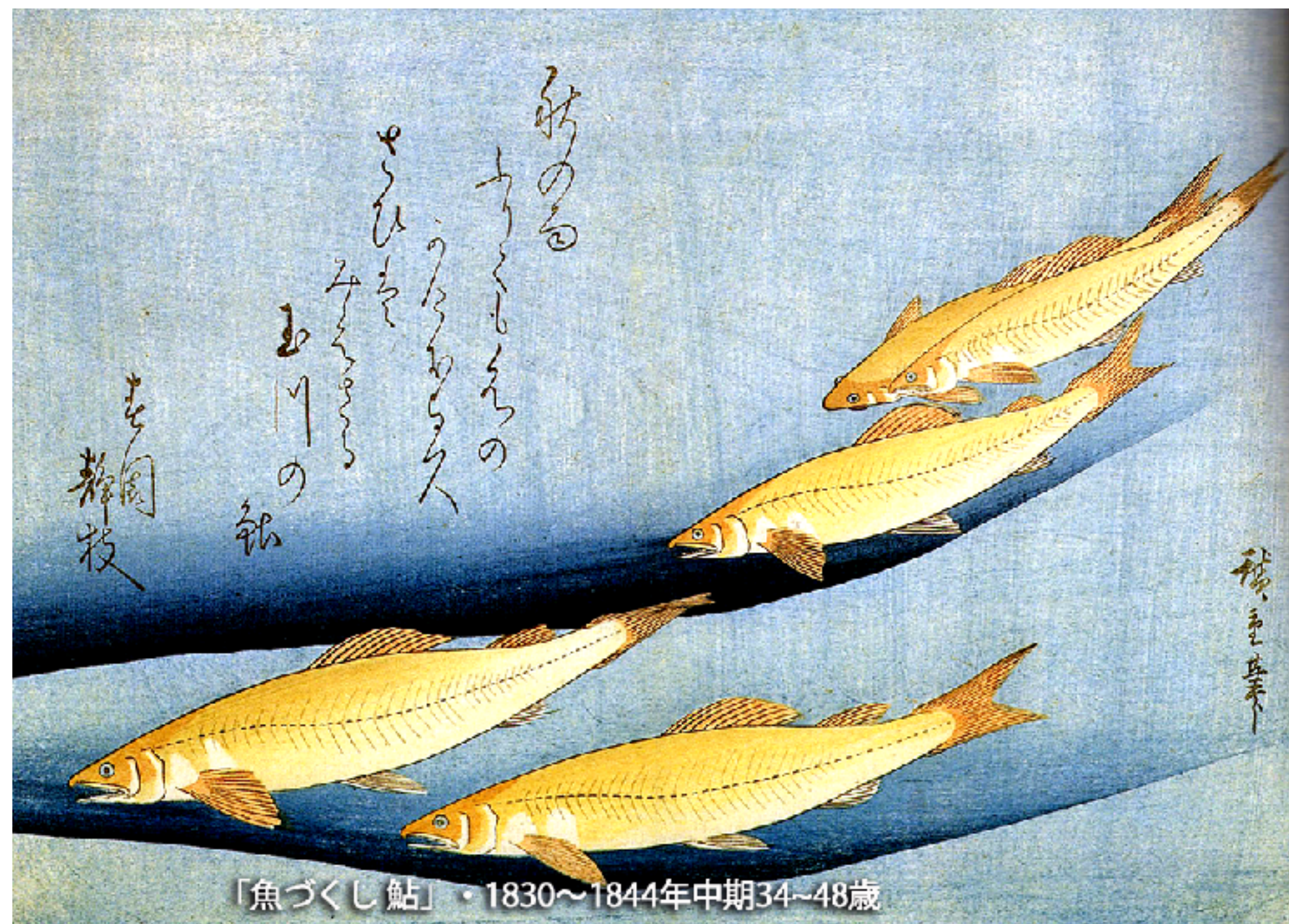


○ うらかな春、川も時間もゆったり流れる・京都名所之内 あらし山満花・1834年38歳頃・・・落下した花びらが意匠文様のように川面を染める嵐山の春景。吉野から移植されたという桜の名所は、文字通り花のトンネルと化している。スイーと滑るように流れる筏の軽やかさは、流れに引かれた幾筋もの流麗な曲線の効果が大いだろう。

○ 縦長の画面で高さを表現・甲陽猿橋之図・1842年頃・46歳頃・・・幕末に流行する掛幅の画面形式を意識した掛物絵の例。他の絵師は美人画や福神図などを残したが、さすがに広重は名所絵で新たな画面に挑戦している。勝景で名高い甲斐猿橋の目も眩むような高さを、縦二枚続きによる版画で再現性豊かに描き出している。

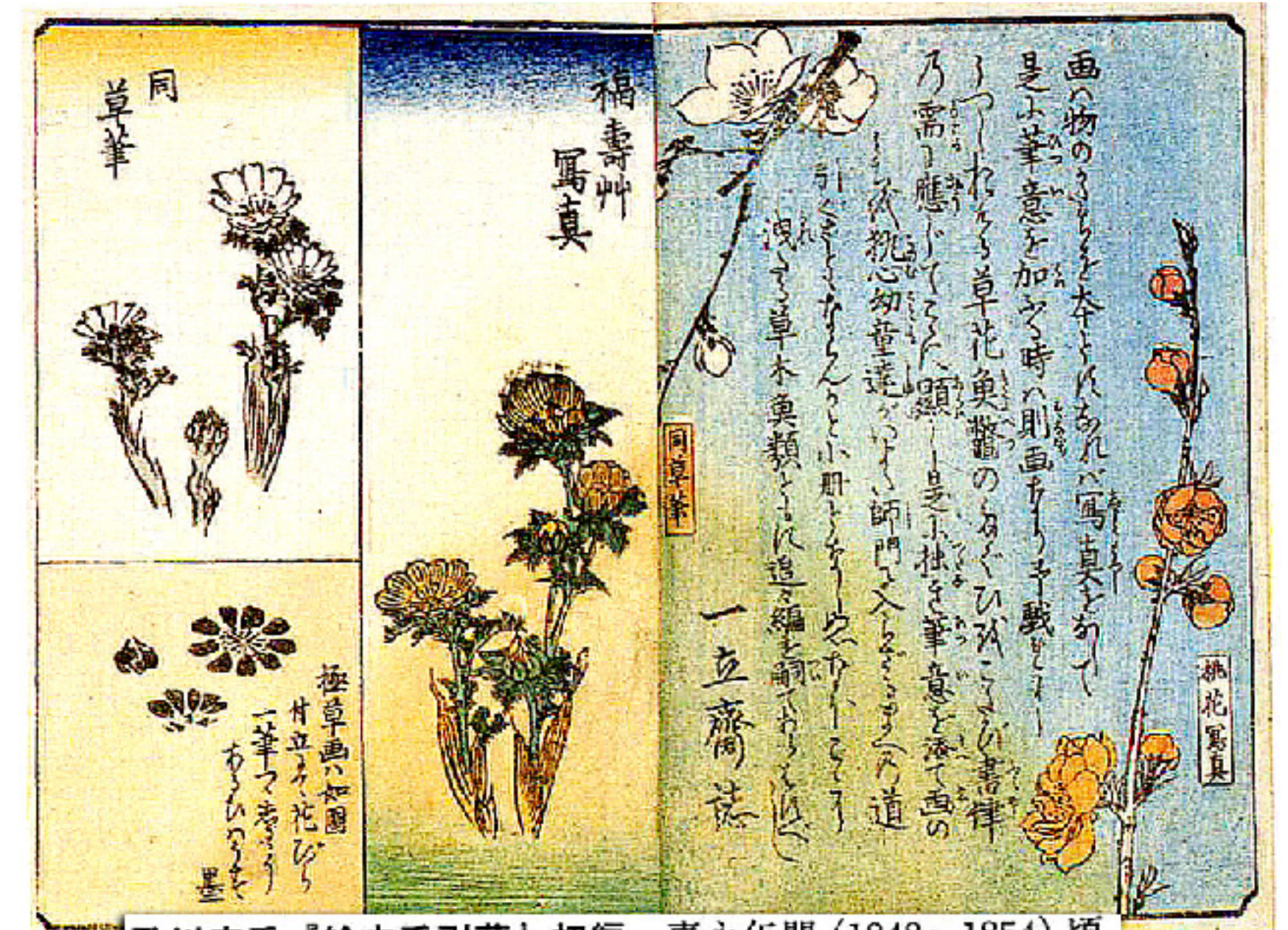


1830(34歳)~1844年(48歳)



「魚づくし 鮎」・1830~1844年中期34~48歳

②-7・版本に表明した作画理念



歌川広重『絵本手引草』初編 嘉永年間(1848~1854)頃
神奈川県立歴史博物館蔵

○ 清冽を水の流れに遊泳する魚たち「魚づくし 鮎」・1830~1844年中期34~48歳・・・清流を泳ぐ鮎の姿を、水上から覗き込んだもの。写生画風を色濃く漂わせ、円山応挙を開祖とする円山四条派の描く作例に近似している。まことにすがすがしい画風の永寿堂版「魚づくし」は天保初期の作だが、同じく永寿堂から出された本図のみ天保中期ごろに単独で出版された可能性があると考えられる。「秋の雨ふりても水のかけおよく さひはみえさる玉川の鮎 春園静枝」(画賛)

○ 広重は自作の版本作品に書き下ろした序文や凡例などで、自らの作画理念の一端を披露している。たとえば、嘉永4年(1851)刊行の絵本『東海道風景図会』では、収載する風景を「**写真の図にあらず、其趣をとり道具を用ひて、余ハ愚意に出るの風景**」と表明し、また嘉永年間刊行の『**絵本手引草**』でも「写真をなして是に筆意を加」えたものを自らの絵と主張している。

1830(34歳)~1844年(48歳)

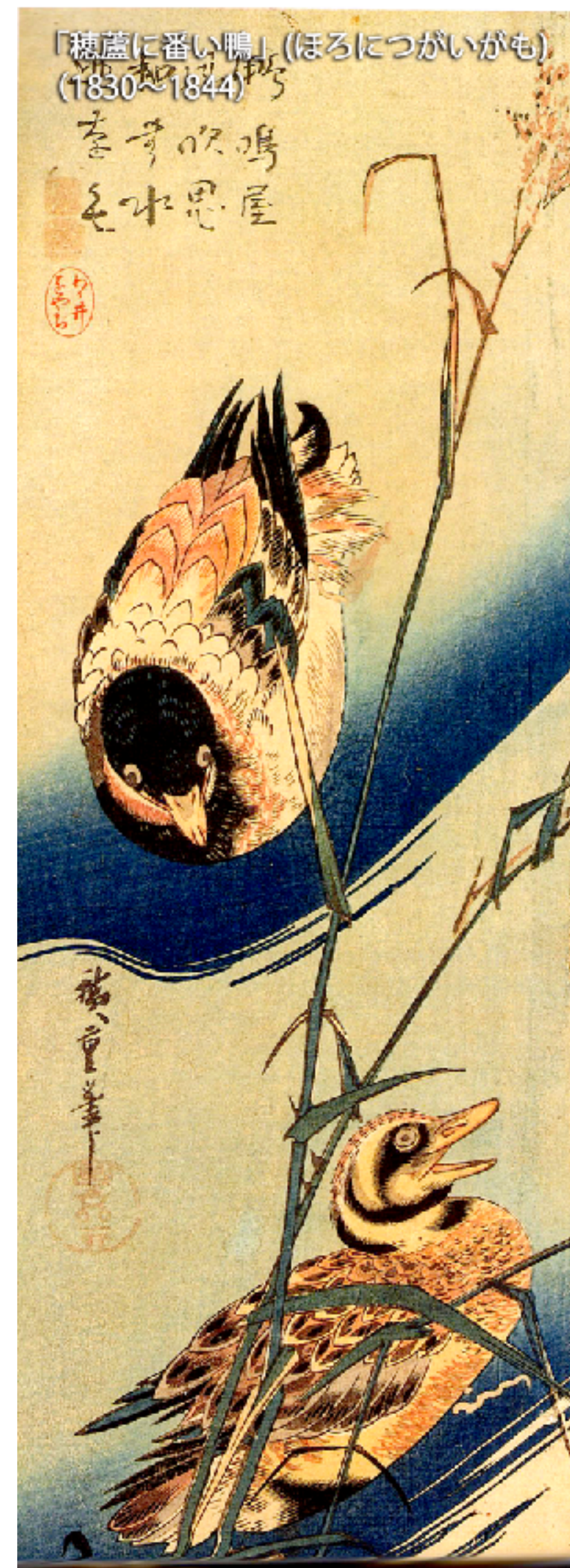
②-8・詩情に富む花鳥画の世界



切手「月に雁」 昭和24年(1949)発行 お札と切手の博物館蔵

○満月をばっさり切り落とす大胆な背景「月に雁(かり)」1830~1844・34~48歳・・・

思い切りよく月を断ち落とし、ちょうど望遠鏡でも覗いたかのように、群れをなす雁がクローズアップしてとらえられる。層をなす雲が月明かりで模様を浮かび上がらせ、豊かな表情をつくり出している。大胆な、それでいて繊細な画面構成も、広重の持ち味である。「こむな夜か又も有うか月に雁」(画賛)。



○バードウォッチングのひとこまのよう「穂蘆に番い鴨」(ほろにつがいがも)(1830~1844)・・・画面中央の視界をさえぎる芦の茎や葉が特徴的だ。雌雄の鴨も水際にて、なにやら睦まじく語らうように回遊している。広重によるこうした短冊判花鳥図は圧倒的な支持を受けたが、その理由は、一見自然なる風景再現を意図した広重の、その実人為的な構図どりもひと役買っている。「鴨鳴屋 風吹思和無 水迺遠毛(かもなくやかぜふきしわむ みずのおも)」(画賛)。

1848(52歳)~1855年(59歳)

○ 傾城傾国の戒めを広喜庶の盾屠で「命」(1848~1854) 52~58歳・・・江戸時代の大名の訓話にもしばしば登場するのが、女色を戒める言葉。命を削るとしてたしなめられ、国をも危うくするというその喩えを、面白可笑しく図像化している。手斧(ちょうな)で削られ、少しずつ短くなる「命」の一字にヒヤリとするが、そこに広重のユーモアを読み取ることも可能だ。



③-1・旺盛な活動、人気絶頂の時

○ 広重「六十余州名所図会 薩摩坊ノ浦 双剣石」

(1853~1857)・・・広重が参照した数多くの種本類のなかでも、興味深い例が左の図である。ここでは広重は旭江の描いた絵の世界に遊び、画中の崖の上に立って望むことの可能な視点を想像して描いている。過去に研究者によってたびたび指摘されている、広重らしいこうしたイメージの豊かさが、目にしたこともない景色をつぎつぎと描かせる原動力となったようだ。



広重「六十余州名所図会 薩摩坊ノ浦 双剣石」
(1853~1857) 57~61

1856(60歳)~1858年(62歳)

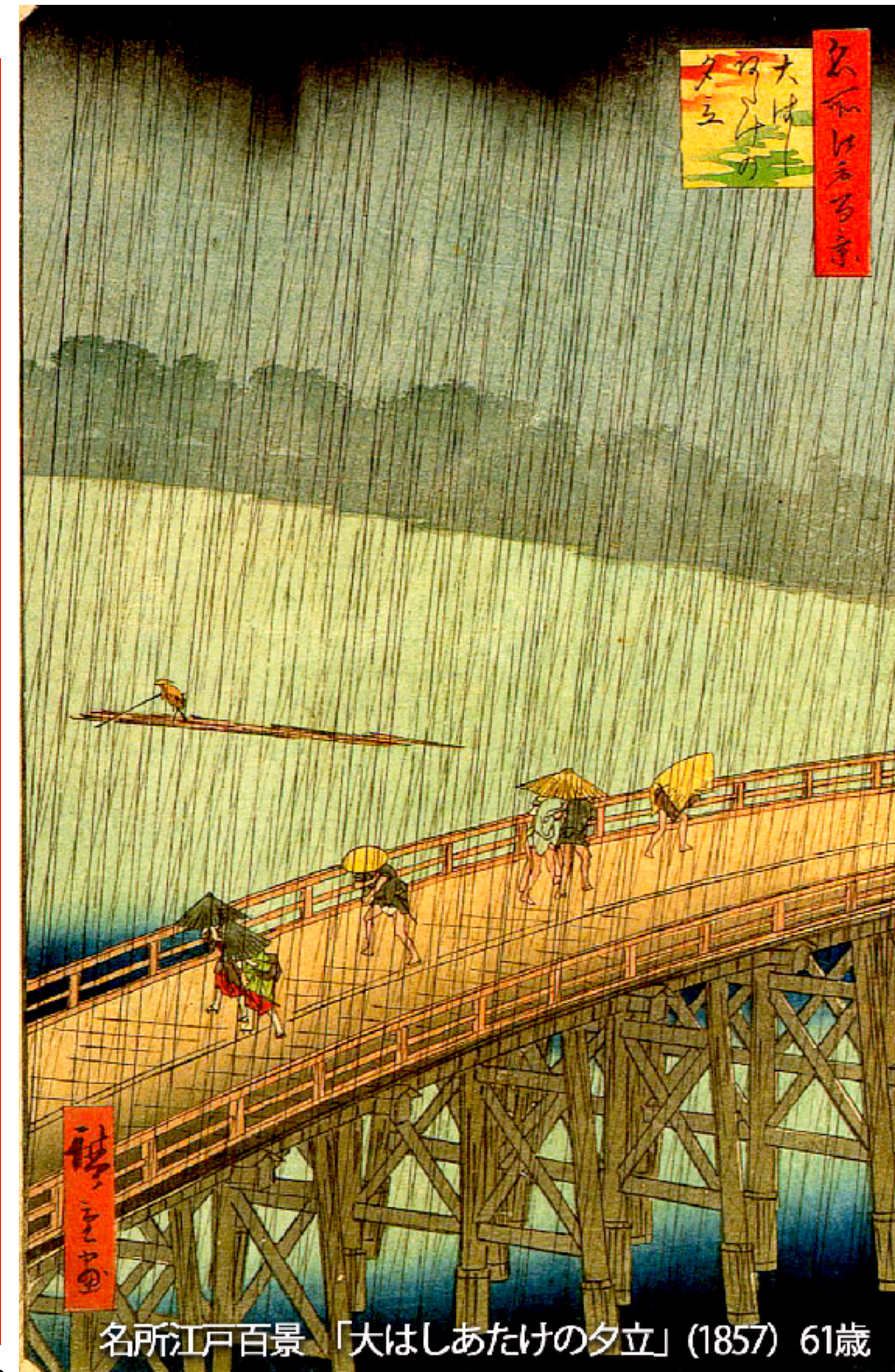
④-1・終焉未だ見ぬ景色を求めて



三代歌川豊国「広重の死絵」 大判錦絵 安政5年(1858)
東海道広重美術館蔵

○老いていまだ見ぬ景色をもとめて、健筆をふるいつづける広重は、老いて剃髪して法体となった齢六十のちょうどその年から、「名所江戸百景」の版行を開始。愛してやまぬ江戸の景色を、人々の暮らしを謳い上げ、江戸名所絵最大規模の揃物に仕上げていった。

○最晩年の安政期、長年慣れ親しんだ一立斎(いちりゅうさい)の号を知人の講釈師に与え、もっぱら立斎と号した広重は、剃髪して法体(ほったい)となっていた。名所絵師として功成り名遂げた浮世絵界の第一人者には、しかしながら決して絵筆を休める怠惰な気持ちにはなかった。

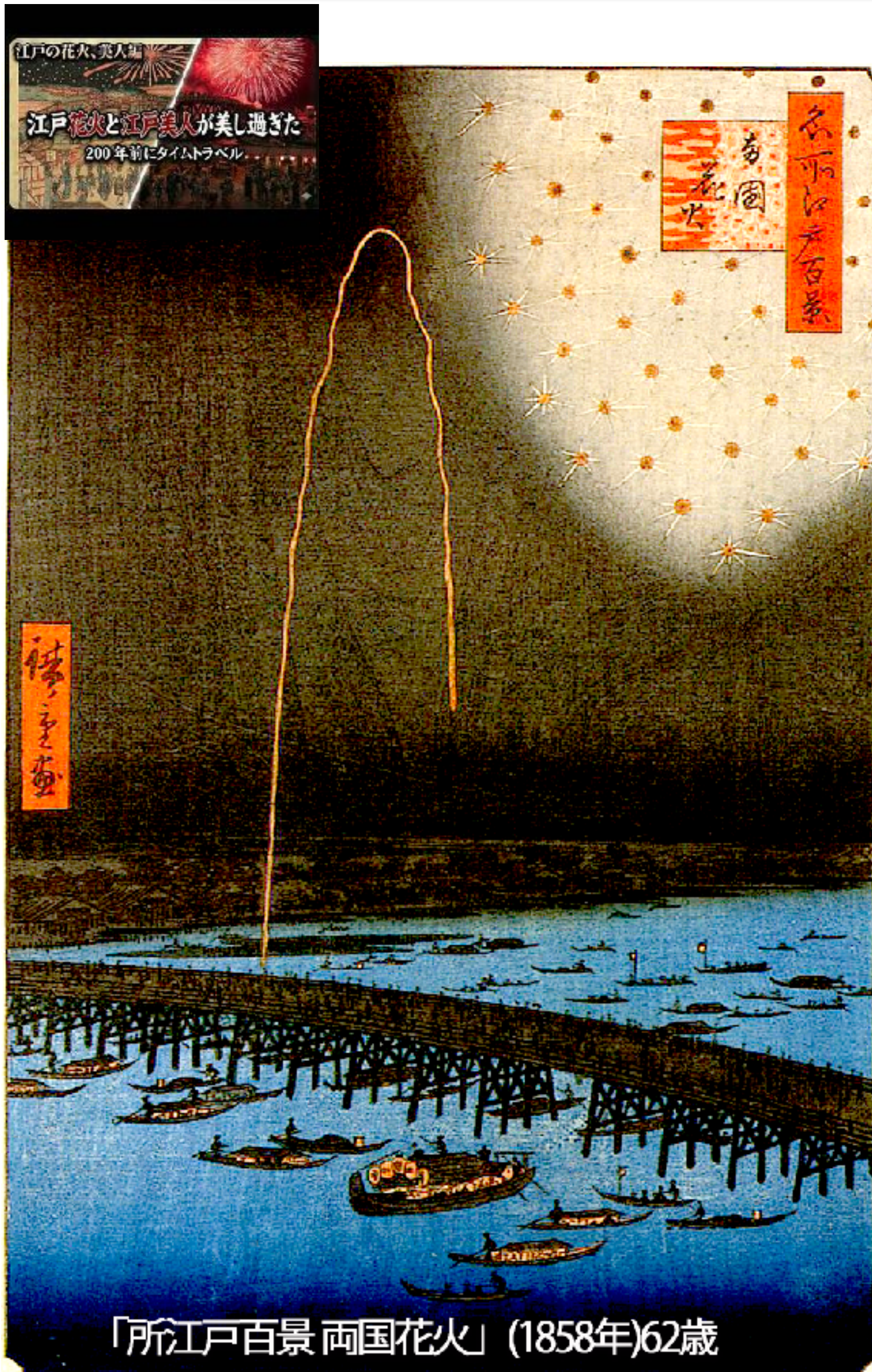


名所江戸百景「大はしあたけの夕立」(1857) 61歳

○密に配された斜線に雨足の強さを知る・名所江戸百景 大はしあたけの夕立 (1857) 61歳・・・
大川(隅田川)にかかる大橋近くには幕府御舟蔵(おふなぐら)がありこれを遠景として、手前にぞぼ濡れる橋の情景を描いたもの。川岸や橋がつくるジグザグの線が画面を左右に横断し、機智に富んだ構図をみせる。ゴッホが油彩画で模写したことから、世界的にも著名な錦絵となっている。

1856(60歳)~1858年(62歳)

④-2・終焉未だ見ぬ景色を求めて



○今まさに夜空に咲いた大輪の花火名「所江戸百景 両国花火」(1858年)62歳・・・大川の川開きとともに、江戸っ子たちが待ちかねた両国名物の花火大会が催される。腹にまで響く破裂音とともに、夜空に次々と大輪の花が開き、橋上にも老若男女が群がり集まっている。「玉屋」「鍵屋」の掛け声が夜空をこだまする、夏の夜の大賑わいである。



○大空を自由に舞う鳥の眼になって「名所江戸百景・深川洲崎十萬坪」(1857年)61歳・・・雪化粧した頂をみせる筑波山をのぞむ、新興の埋立地、深川の景。作者広重の視覚は、図上に描かれる鷲のそれに擬せられ、高空から見下ろす景觀はまさしく大観的な鳥瞰図とよんでいい。よくみると海上を桶が漂流しているが、そこに何が入っているのか、思いを巡らせるのも一興だろう。

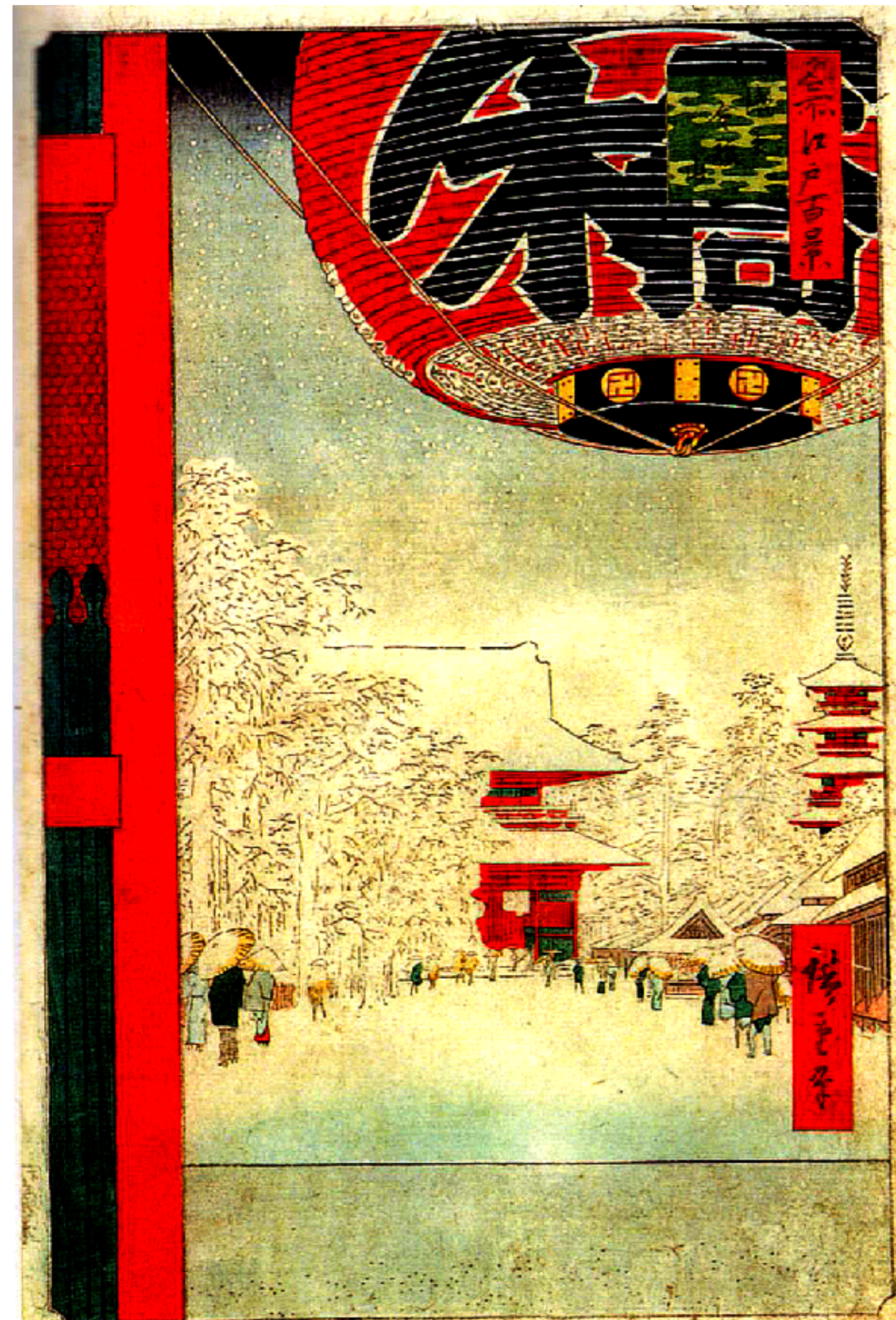
1856(60歳)~1858年(62歳)

④-3・終焉未だ見ぬ景色を求めて



○大晦日の夜、関東一円の狐が集結する「名所江戸百景 王子装束系の木 大晦日の狐火」

(1857) 61歳・・・写生風景の版画集のなかでは珍しく、幻想的な物語をとりあげた異色作。関八州の稲荷社を束ねる王子稲荷の、榎(えのき)の下に集まる妖しげな狐たちを描く。寒さに凍える満天の星明かりが照らし出す風景表現は広重そのものだが、狐火の着想は斎藤月琴(げっしん)編『江戸所図会』巻之五(1836年刊)から得たとの指摘がある。



○雷門より望む仁王門と五重塔「名所江戸百景 浅草金龍山」(1856)

60歳・・・金龍山浅草寺は、古くから江戸庶民の観音信仰を集めた聖地である。ここでは雪のじゅうたんですっかり覆われてしんみりした景色がとらえられるが、おそらく広重本人は、多くの人々でごった返す年末の歳の市での盛況のさまを、脳裏に浮かべながら描いたのだろう。

1856(60歳)~1858年(62歳)

④-4・終焉未だ見ぬ景色を求めて

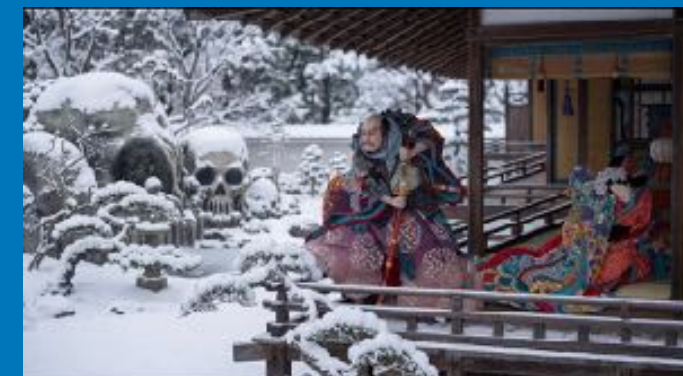


○ゴッホが魅せられた特異な構図

「名所江戸百景・亀戸梅屋舗」

(1857年)61歳・・・江戸で人気の梅見の名所は、蒲田や亀戸といったところだろう。本図は亀戸の梅屋敷に取材する。極端な近景拡大とその向こうの遠景との対比は、天保年間（1830～1844）初期の江戸名所連作でも試み、最晩年の本版画集でも頻繁におこなっている。本来目障りなはずの梅の幹や画面左上隅の樹名札が、あまり邪魔に感じられないのが不思議だ。本図もゴッホの模写で海外に広く知られている。





○ 本日のテーマ「歌川広重の生涯と作品の軌跡」はどうでしたか。ご感想お聞かせください。

○ 今後のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお話しください。

○ また次回お会いできますこと、楽しみにしています。